

# 日本の歴史 11

稲垣 宏行

『日本の古代文化』 林屋辰三郎 著 (岩波書店) x, 335, 18p. 15cm.

本書が示す「古代文化」とは、農耕文化が誕生した弥生時代から平安京が登場した平安時代初期までの文化を指しています。そのため「古代文化」と言っても土器や古墳だけでなく、『日本書紀』や『古事記』のような歴史に関する書物、平城京のような「都城」も含まれています。しかし、ここで目をひかれるのは、弥生から平安までの時代を通して「古代文化」に頻りに登場する宗教的な存在です。著者は弥生時代の農耕文化に登場する、神々の座であり自然との共生を象徴する「社」について紹介しています。他にも銅鐸、伽藍、平安初期の御霊会など、多くの宗教的な象徴と行事を時代の推移に従って取りあげています。それらは、自然、神道、仏教などあらゆるものを含んだ存在で、「古代文化」の性格を顕著に表したものだと言者は考えています。

また著者は、「はしがき」で自然との共生を忘れた現代社会に対して強く警鐘を鳴らしています。「社」などに見られる自然との共生を重んじる「古代文化」に目を向けることで、現代社会の在り方を考えてみては如何ですか。

210.3-Hay

『天下泰平と江戸の賑わい：江戸期元禄 - 文化・文政』

小和田哲男監修・年表解説 (世界文化社) 167p. 24cm.

江戸時代の元禄から文化、文政の頃は、浮世絵や歌舞伎などの町人文化が栄えた時代ですが、それにも増して印象的なのは、同じ時期に登場した徳川綱吉、柳沢吉保、田沼意次などの著名な政治家たちです。本書では、彼らの作った制度と彼らのいた時代について井沢元彦氏ら 15名の執筆者が考えを述べています。しかし、その評価は執筆者によって異なっています。例えば徳川綱吉の政策「生類憐みの令」については、「生き物のむやみな殺生を戒めるためには過激に過ぎる法も必要」と評価する人もいれば、「庶民に多大な被害を与えた天下の悪法」という批判的な見方もあります。

元禄、文化、文政期の政策に対する 15名の著名人たちによる異なった評価。これらは私たちの一元的な見方を戒めると同時に、これらの時期を、多元的な視点で考えるための判断材料を強く提示しています。

210.08-Niho-7

『大岡忠相』 大石学 著 (吉川弘文館) 16, 300p. 19cm.

公平な判決を数多く下したことから、名奉行として名高い大岡忠相。彼は町奉行としての能力を時の将軍徳川吉宗に高く評価され、吉宗からもよく助言を求められていたと本書は述べています。また、忠相は吉宗と共に「享保度法律類寄」のような法典の編纂や公文書システムの整備に携わるなど、享保の改革に深く関わったことも記述されています。

忠相の能吏としての魅力はそれだけではありません。彼は仕事の欠勤も少なく、欠勤した日ですら手紙のやり取りによって公務を支えてきたと言います。また忠相が寺社奉行時代、公用で同僚の屋敷を訪れた際に、彼は自分の用件をその同僚にではなく、用人に伝えたという話もあります。これは物事に慣れた用人に伝えた方が合理的だと考えたからで、忠相の他者に対する繊細な気遣いが表れています。「大岡越前」とも呼ばれる江戸中期の幕臣、大岡忠相の実像に迫る本格的な伝記です。

289.1-Ois



いながき ひろゆき (係・情報サービス課)